追加版

地域と学校の連携
活動事例

地域と学校の連携・協働を推進している小学校（３校）の取組状況について，聞き取りを行い，まとめたものです。

連携・協働の立ち上げ期の学校から成熟期の学校までをモデルケースとして取り上げております。

今後の会議「地域と学校の連携」の参考資料としてご一読ください。

地域連携の立ち上げとなった事例

【柏市立酒井根東小学校】

活動概要・目的

・地域の方による図書館の毎朝開放
・大学生の協力による朝の英語授業
・防災公園を利用した農業体験　等
・「社会に開かれた教育課程」の推進や地域とつながりを持つことで，子供達に様々な学びを広げることが目的

活動における工夫やポイント

・校長が率先して，学校評議員を招き，給食を囲んで，地域の情報収集から始める。
・保護者や地域住民と身近な教育課題について，「教育ミニ集会」を企画。
・多くの人に参加してもらうため，コンビニやスーパー，町会の回覧等にチラシを貼り，多くの参加者を集める。
・ミニ集会では，児童の読書の少なさをテーマに意見交換を行い，地域住民の提案による**図書館の朝開放**につながる。
・その他，市を通じて，大学のボランティア参加希望を受け，**大学生による朝の英語授業**や地域にある資源を活用した学びの場を創出（**防災公園の農業体験**）

＜教育ミニ集会のチラシ＞

【図書館の朝開放までの流れ】

地域にチラシを配付（コンビニ等や回覧板） ▶ 教育ミニ集会の実施（100人近くの参加） ▶ 地域連携事業の実現（図書館開放）

活動の成果

- 教員の**負担軽減**（地域の方が講師となることで，生徒をよく把握）
- **児童の学びが豊かになる**とともに生きるために役立つ学びになる
- 児童に社会とのつながりを見出し，**地域の活性化**が図れる。
- 担任レベルの**教員の学び**につながる。

今後の展望・課題

・地域の民生委員とのコラボレーション

⇒学校に来れない児童の増加による担任の負担を改善するため，民生委員の見守り（連絡及び訪問）の協力を依頼する。

・児童の社会教育としての地域貢献

⇒子どもたち（５・６年生）に高齢者宅の朝のゴミ出し等の手伝いをさせることで，地域のつながりを育む。

・人材バンクの構築

⇒それぞれのボランティアのリーダー（学年委員長，図書館，大学生，防災公園，防犯安全パトロール等）が，集まり，情報共有して，必要に応じた人材を集められるシステム化を検討している。

・今後について

⇒ＰＴＡや教員は，卒業や異動により，人が変わっていくので，その課題を解消するために，将来的には，**歴史を引き継げる人**（例：地域のおやじの会等）に運営を任せていきたい。

⇒地域が求めているのは**若い世代**，もっとＰＴＡを巻き込んでいきたいと考えている。

追加①

【柏市立酒井根東小学校】

図書館の朝開放（地域の方の声）

朝の図書館開放に協力しようと思ったきっかけ。
・地域の回覧板を見て。 ２年前に退職したが，朝の図書館開放の時間帯は特にすることがなかったことと，本が好きであったことから協力するようになった。 ・学校の見守り隊をしていて，校長先生から声がかかった。
地域の協力者は，どのように集まったか。
・回覧板を見て協力した。 ・見守り隊をしている方の中の口コミで７名が集まり，今年から９人となった。
地域側として，学校と関わった（連携）ことによる成果
・子どもと友達感覚で楽しい。 ・子どもからニックネームがもらえた。 ・コミュニケーションと挨拶。
地域側から見た連携・協力による学校側（教員・児童）への成果
教員 ・司書教諭とボランティアは時間が異なるため，顔を会わせることがないが，連絡ノートで活動内容の連絡を取り合い，ボランティアに仕事を任せている。 **児童** ・今までは，わからないが挨拶をしてくれる。明るい。 ・友達がいると図書室に入ってくる子も多い。 ・１人でより，１冊の本を２，３人で話しながら，コミュニケーションをとりながら見ている傾向がある。 ・本をきちんと書架に戻す，椅子をきちんと戻す，挨拶して出ていく等，躾ができていて感心している。

どのような仕組みがあると地域の方は活動しやすいか。
・地域では，学校のニーズがわからない。 ・学校からの情報発信がないと地域の人は動けない。 ・地域の人は，学校との関わりができると自然と横のつながりがでてくる。
学校と活動・協力しやすい地域
・酒井根東小学校の場合は，ふるさと協議会よりも町会との関わりが密な学校。町会と学校が連携することが多い。
図書館ボランティアに関わる前の学校に対するイメージ
・仕事が学校と関わりのある業務であったことから，あまり学校に抵抗がなかった。 ・子どもは３０年前ぐらいに卒業しているが，町会の役員や見守り隊をしていたため，敷居が高いとは感じなかった。 ・校長先生がよく活動に顔を出してくれるため，フランクに話ができる。 ・子どもが好き。野球の審判をしていたこともあり，抵抗はなかった。普段から声かけしている。

～ボランティアの内容～

・火曜日，木曜日の週２回，本の返却のお手伝いを７人で割り振りし活動。

・子ども達から「本を借りれないのか。」と，要望があり，今年の１月から貸し出しも開始。
４月から毎日，開館。

地域連携が成長期にある事例

【柏市立柏第六小学校】

活動概要・目的

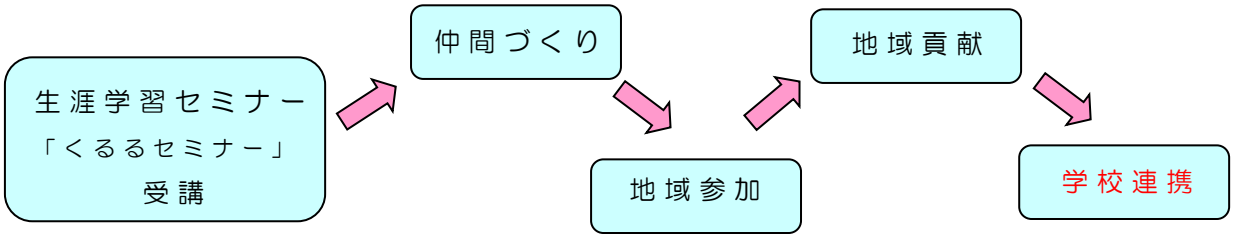
・くるるセミナー

⇒くるる花育ガーデン，くるる合唱団，放課後学習アドバイザー（放課後子ども教室）等

・地域住民の高齢化・孤立化，児童数減少，地域と学校の関係が希薄化という地域課題が存在。

・平成 26 年，生涯学習を通じて地域住民の間につながりを作り，高齢者の社会参加を促すことを目的としたセミナーが始まる。

・参加者から自主活動グループが誕生し，地域課題の解決を目指し，活動を始め，その一環として学校との連携が始まった。



活動における工夫やポイント

・生涯学習セミナーから派生した活動グループが多岐に存在し，様々な方面で活動が展開されている。

・元々は一つのグループであるため，地域の窓口が一本化されている。

・学校の花壇の整備活動では，学校との打ち合わせは，年度始めの打ち合わせのみであり，あとは年間を通して，活動グループが自由に敷地内に出入りし，自主的にボランティアを行っている。

・花壇の整理のみならず，児童の生活科授業や委員会活動では，講師等もつとめる。

【花育ガーデン会と学校連携の流れ】

年度初めに窓口を通して打ち合わせ ▶ 年間を通して，活動者が来校し，活動を展開 ▶ 地域連携事業の実現（花を通じた関わり）

活動の成果

・教員の**負担軽減**
・窓口が一本化で，多くの打ち合わせを要しないため，**調整が図りやすい**。
・地域の**活性化**（活動者がやりがいを持っている）
・放課後子ども教室への協力による児童の**学力向上**
・地域側も気楽に活動しているため，**お互いに負担がなく**できている。

今後の展望・課題

・複数の人が講師を担うことが多いため，学校と地域の**教育方針に差**が生まれてしまう。
・活動者が主に高齢なので，**若い人**を入れていく必要がある。
・くるるの他に，学校支援地域ボランティアやおやじの会の活動も活発だが，**団体間の連携**が進んでいない。
・今後は，連携が生まれてくると地域活動が発展する。
・今後は，ボランティアが学校へ来るだけではなく，児童も地域活動に参加していくのが理想。

追加②

【柏市立柏第六小学校】

くるるセミナー　（コーディネーターの声）

六小くるるセミナーのきっかけ

・２０１３年からスタート。
当初は，社協・地域支援課・大学が連携し講座をつくっていた。講師を東大から派遣し，大学の歴史などの座学での講座が中心であり，自主的なサークルを作っていくコンセプトで学校とつながる方向はなかった。
・六小くるるセミナーは，ガーデニングからスタートし，地域の方が関りはじめた。

東大ＫＩＤＳセミナー

・東大ＫＩＤＳセミナーは院生の学生が企画して活動していて，２０１８年もセミナーを開催。ボランティアが企画をしたり，募集をしたりコーディネーターになったりすることは難しいため，大学がコーディネーターになっている。今年のセミナーには，学校支援コーディネーターの方が参加してくれた。
・先生が関わり，ＫＩＤＳセミナーを学校と，一緒につくっていくことが，引き継がれずに大学の持ち込み企画になってしまっている。
・ＫＩＤＳセミナーを行うにあたって，地域・学校との連携の難しさは，大学の場所（本郷）が離れていること。
・子ども達の状況がわからないため，管理職の先生が声をかけてくれることで，先生から子どもの状況が聞けてわかったりする。先生の意識にもよる。
・子どもにとって，親，先生以外の人と関わること，そして，地域の方が無条件で褒めてくれることがよい。先生からは評価があるが，地域の方からは評価がない。

「子どもの意外な姿をみることが楽しい。」と，ボランティアや先生から話を聞いている。

他のエリアで広げる場合
・大学としては，みんなが主体的に動いてもらうように促していく。地域の特性もあるが，地域で発言力のある方がコーディネーターとなるより，学校と地域の両方の意見を上手にくみ取り調整する方がコーディネーターになるとよい。 ・学校側の意欲，管理職のリーダーシップも重要である。北海道富良野市の事例では，意志を継ぐ先生がいることでつながっていく。地域性にもよるが，地域に任せる方法もよいのでは。 ・六小のプランナーズ（ＫＩＤＳセミナーに関わるボランティアの方々）は学校に出入りしている。 保護者アンケートでは，「子どもを見てくれてありがとう。」と感謝されている。理解されていることで，顔が見える関係になっている。

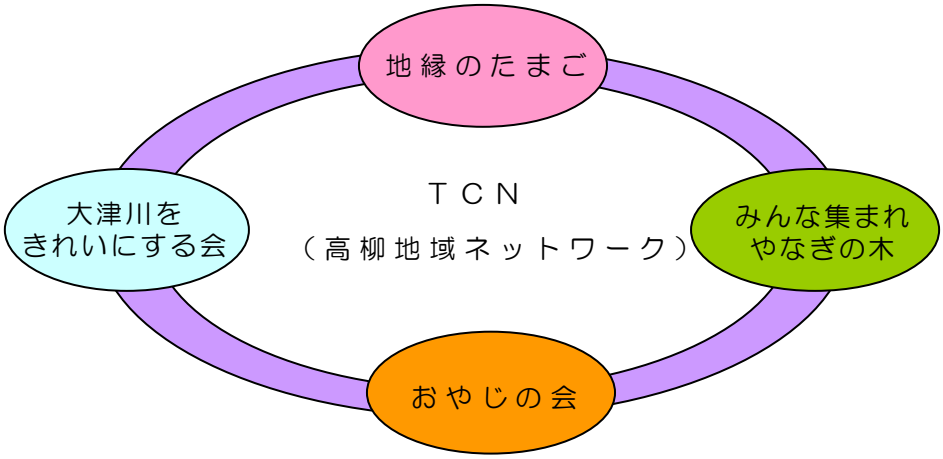
活動を継続するための工夫
くるるセミナー ・メンバーを増やすために，もう一度，同じ講座を開講し，新たなメンバーがグループに入っていく。母体となる講座をまわして，サークルは活動を続けながら，セミナーで新規開拓をしていく。活動内容を発表する場を設けることで，モチベーションが上がる。講座がないと新しい人は入ってこない。 ・ボランティアは，子どもと接することが好きな人が多い。 ・東大ＫＩＤＳセミナーでは，参加は同じ人が多く，地域活動を学んでも実施する場がない。

地域連携が成熟している事例

【柏市立高柳小学校】

活動概要・目的

・ＴＣＮ（高柳地域ネットワーク）
⇒おやじの会，大津川をきれいにする会，多世代交流型コミュニティー（地縁のたまご），みんな集まれやなぎの木
・高柳中学校が荒れていた時期に，地域全体で何とかしようという目的の基，始まる。



活動における工夫やポイント

・地域と連携した様々な団体が存在し，多方面での事業が実施されている。
・地域と学校の関係性が密であるため，**日常の授業で地域の人材活用**が図れている。
・地域の**窓口が一本化**されている。
・地域側で主体的に動いている。
・**行事においては，常に地域と学校がセット**になっている。
・地域行事が多く，子供にとって良い経験の機会となっている。

【ミシンボランティアによる授業支援の

地域の窓口を担う方に連絡・依頼 ▶ 窓口の方が，各団体を通じて地域に声かけ ▶ 地域連携事業の実現（授業支援）

活動の成果

・子供に**ボランティア精神**が根付いている（川のゴミ拾いも当然の行事としてとらえられる）。
・子供が**素直**に育っており，地域貢献としてお年寄りとのふれ合いの会も実施しているため，地域内の高齢者とも親しい（地域活性化）。
・教員の**負担軽減**

今後の展望・課題

・地域活動は成熟しており，地盤はできているものの，現在の活動者が高齢化しており，後継者が育っていないため，**世代交代**が大きな課題となっている。
・多くの団体が存在しているが，**思惑はそれぞれ異なる**ので，学校だけで決められることが少ない（学校として変えたいことを変えられない）。
・団体ごとの地域行事が多く，休日出勤等により**教員の負担**となっているため，学校としては集約できると良い。
・団体，活動を**コーディネートできる人**がいると良い（地域側の体制の確立）。
・学校の教員は人事異動もあるため，地域と学校の間を取り持つ組織的なものや地域連携の担当職員がいると良い（学校側の担当の確立）。